

百合、欧州に伝わる

稲宮 健一

家の近くはかつての相模の国鎌倉郷で、現在は横浜市戸塚区、そこにある舞岡公園をウォーキングしていると、白い自生の百合が草々の中の所々に咲いている。確か、鎌倉の切通しに咲いていた野生の百合にイギリス人が魅せられて、欧州に持ち帰ったと、うっすら覚えていた。もしかこの花も関係があるのか、家に帰って早速ネット検索した。

百合を日本から持ち出したのはシーボルト、長い船旅で傷んだ中から生き残った球根をベルギーのゲント植物園が引き受けた。そこで育ち開花した百合はルビーやガーネットのように美しいと評判になった。白い百合は欧州では聖母マリアのシンボル「マドンナ・リリー」として描かれていたが、残念ながら欧州では自生しておらず容易に手に入る花ではなかった。

幕末に欧州に紹介された百合は、明治二〇年頃から鎌倉の山ユリやササユリの球根が高価な輸出品として横浜港から出荷されるようになった。横浜山下町や元町の異人館に居を構えた貿易商が欧州に輸出した。当時百合は生糸、茶に次ぐ輸出品であった。輸出商社の一つのアイザック・バンディング社は百合を求めて、関東一帯のみならず、沖永良部島まで探索し、買い付を行った。一方地元では同社の副社長に大地主の角田助太郎を迎え、地元の鎌倉、玉縄で百合の球根の栽培を行わせ、さらに近郊一帯に百合の球根の栽培を広げた。バンディング社は輸入した球根をロンドン近くの倉庫で保管して、丁度イースタに合うように開花させ聖花として高価で販売した。一方、角田は百合の輸出で財を成し、百合御殿を建てた。しかし、昭和になると、米国でも百合の栽培が可能になり、バンディング社の百合事業は終わりになった。

時を経て、昭和三七年に開館した神奈川県立大船フラワーセンターは（現在は日比谷花壇大船フラワーセンターに衣替えした）輸出用の百合の栽培に力を入れ、一時期に百万球以上の輸出実績を上げたことがあり、今も栽培育成の研究が続けられている。